

第2回 中部山岳国立公園南部地域山岳部における 利用者参加制度のあり方検討会 議事要旨

作成：JTBF

1. 日時

2021年9月7日（火）14:00～16:00

2. 開催場所

松本市浅間温泉文化センター 大会議室

3. 出席者

次頁参照

4. 議事次第

1. 実証実験の実施に係る報告事項について
2. 利用者アンケートの実施と実証実験のとりまとめ方法について
3. その他

5. 配布資料一覧

- ・ 議事次第
- ・ 構成員及び出席者一覧
- ・ 座席表
- ・ 資料1 実証実験の実施概要
- ・ 資料2 利用者アンケート設計の考え方・調査票案・結果の取りまとめイメージ
- ・ 参考資料1 広報媒体および設置先一覧
- ・ 参考資料2 第1回 中部山岳国立公園南部地域山岳部における利用者参加制度のあり方検討会 議事要旨

順不同・敬称略（○：現地出席 ●：オンライン遠隔出席）

組織名	役職等	ご氏名	ご出席
中部森林管理局中信森林管理署	署長	石橋 岳志	○
同	森林技術指導官	軒端 信司	○
同	森林整備官（ふれあい）	吉村 暁美	○
長野県環境部自然保護課	課長	新津 俊二	
同 自然公園利用推進担当	課長補佐	松尾 誠	○
同 自然公園整備係	係長	柏木 和之	○
長野県観光部山岳高原観光課	課長	田中 達也	
同 山岳高原観光	課長補佐兼係長	丸山 佳枝	○
同 山岳高原観光係	主事	丸山 遼	○
松本地域振興局環境・廃棄物対策課環境保全係	課長補佐兼係長	古田 洋	○
松本地域振興局商工観光課	課長	平林 裕司	○
松本市総合戦略局アルプスリゾート整備本部	本部長	桐沢 明雄	○
同		木下 収	○
安曇野市商工観光部観光交流促進課	課長	大竹 範彦	○
同 拠点維持整備係	係長	由井 太介	○
北アルプス南部地区山岳遭難防止対策協会（松本警察署）		福間 健	○
北アルプス山小屋友交会（横尾山荘）	会長	山田 直	○
同（西穂山荘）	副会長	村上 文俊	○
同（北穂高小屋）	副会長兼事務局	小山 義秀	○
上高地町会（中ノ湯温泉旅館）	町会長	小林 清二	○
上高地観光旅館組合（上高地温泉ホテル）	組合長	青柳 浩一郎	○
（一財）自然公園財団上高地支部	所長	加藤 銀次郎	○
東京農工大学	名誉教授	土屋 俊幸	●
大町山岳博物館 / 信州大学	館長 / 名誉教授	鈴木 啓助	○
（公社）日本山岳ガイド協会	理事長	武川 俊二	●
北海道大学大学院農学研究院	准教授	愛甲 哲也	●
認定NPO法人信州まつもと山岳ガイド協会やまたみ	事務局長	福田 浩道	○
（株）山と溪谷社	取締役 山岳出版本部 本部長	萩原 浩司	●
山岳ライター／山の日アンバサダー		小林 千穂	●
環境省中部山岳国立公園管理事務所	所長	森川 政人	○
環境省上高地管理官事務所	国立公園管理官	大嶋 達也	○
環境省信越自然環境事務所国立公園課	係員	岡田 真次	○

6. 議事要旨

1) 実証実験の実施に係る報告事項について

環境省より資料1・参考資料1を説明後、議論。

- ・ カードの裏面にチラシやラミネに書いてあるような情報を盛り込んでどうか。
(信州大学・鈴木)
- ⇒ 各種広報媒体に掲載された2次元バーコードは北アルプス登山道等維持連絡協議会(以下、協議会)ウェブサイトのトップページにリンクしており、アンケートに誘導するようになっている。媒体ごとの情報量や内容に差がつくと、アンケート調査の結果取りまとめが難しくなる可能性もあり、留意が必要と考えている。また、カードは紙幅の関係上情報量が限定されてしまう制約があり、この観点からも今回はカード裏面への情報記載を断念した。(環境省・大嶋)
- ・ オンラインで寄付金を支払った利用者の登山行動や属性の違いは把握できるのか。
(信州大学・鈴木)
- ⇒ 広報媒体や看板の設置箇所に応じて2次元バーコードが異なっており、どの媒体や看板からウェブサイトアクセスしたか把握できるようになっている。また、アンケートを回答した方については、旅行形態や登山の実施有無、登山経験などが把握できるようになっており、寄付金を支払った利用者の特徴についてはアンケート調査から分析したいと考えている。(環境省・大嶋)
- ⇒ 寄付者かつアンケート回答者については、寄付額や登山内容、回答者属性等が紐づけて把握できるようになっている。一方、寄付はしたがアンケートに回答しなかった利用者のデータについては、今回取得することができない。(日本交通公社・那須)
- ⇒ 今回の実証実験の方法は既に決まってしまうかもしれないが、今後、どこの登山道がどれぐらい利用されているか等の情報も必要になるのではないかと。ITを活用して、そういった情報を取得する仕組みを検討してはどうか。(信州大学・鈴木)
- ⇒ 持ち帰って検討させていただく。(環境省・大嶋)
- ・ 山道に関する協力を募る場合、富士山や妙高、大雪などでは協力金という言葉がよく使われている。今回の制度で寄付金としているのは、任意であるということアピールするためか。(山岳ライター・小林)
- ⇒ ご指摘の通りである。第1回検討会でも議論したが、先行事例における課題として、任意の協力金の実態として半強制的に徴収されることがあると考えている。今回の実証実験では任意であることを利用者に明示し、利用者自らの意思でお支払いいただくようにしたいと思っている。(環境省・森川)
- ⇒ 利用・寄付する側としては、毎回寄付するべきか、寄付額はいくらにすべきか等を考えることになり、精神的な負担にもなることも想定される。ぜひ、協力する気持ちが大事なのだということを強く発信してもらえると、利用者としては協力しやすい。(山岳ライター・小林)
- ・ アンケートで利用者に対し、寄付を集める方法についてアイデアを尋ね、今後の運用に役立ててはどうか。例えば、私が持っているアイデアの一つとして、トイレ利用に使えるクーポン券の発行が

ある。登山者はトイレチップ用の小銭を用意して山を登るが、荷物が重くなったり、財布を出す手間が増えたりといった負担を強いられている。例えば、トイレの入り口でクーポン券のバーコードをかざすことで利用できるような仕組みができれば、登山者の利便性が高まる。さらに、このクーポン券の収益が登山道の整備にも役立てられる仕組みにすることで、利用者が善意に基づいて支払ったお金が登山道の整備に充てられると同時に、支払いの見返りとしてトイレ利用上の不便が解消されることになり、より多くの利用者の気持ちを寄付に向かせることができるのではないか。登山道整備とトイレ利用の課題をうまく重ね合わせた形で寄付金を募ることができないだろうか。(山と溪谷社・萩原)

- ⇒ 今回は登山道に焦点を絞り短期間で実証実験まで漕ぎつけたが、それができた背景には、協議会において登山道維持に関する費用規模や負担感が整理されていたことが挙げられる。一方、し尿処理については整理が難しい部分があり、すぐに取り組むことはできない。ただし、し尿処理や遭難対策等においても山小屋の働きが大きく、今後はそういった視点での検討もしていきたい。(環境省・大嶋)
- ⇒ 登山道維持に対する登山者の理解を求めることに関連して、山と溪谷社では昨年、山小屋エイド基金というクラウドファンディングを実施した。ここでは、コロナ禍で経営が厳しくなっている山小屋を守るために、善意による寄付を呼びかけた。この呼びかけに対し、約9,400人の寄付者に参加いただき、合計約9,600万円が集まった。山小屋エイド基金では、登山道やトイレ整備において山小屋が無くてはならない存在であることを発信したところ、そういった山小屋の働きを知らなかったという感想を多くいただいた。これを受け、登山道整備における山小屋の尽力がまだ十分に利用者に伝わっていないことを実感した。今回の取り組みでは、メディア等も活用しながらそういった部分をしっかり発信する機会にしていきたい。(山と溪谷社・萩原)

2) 利用者アンケートの実施と実証実験のとりまとめ方法について 環境省およびJTBFより資料2を説明後、議論。

- ・ アンケートの内容を利用者に読んでいただくこと自体が、今回の制度やその趣旨を周知することにつながると感じた。また、アンケートに協力すること自体が登山道維持に役立つということをPRすると、回答に対するインセンティブが無くても協力してくれる登山者が増えるのではないか。例えば、アンケートの最後に「あなたの貴重な意見を登山道維持にこれから利用していきます」というような文言を設けてはどうか。(山岳ライター・小林)
- ⇒ アンケートは、今後の持続可能な登山道維持の在り方を検討する目的で実施する。アンケートへの協力が登山道維持につながるというのはご指摘の通りである。ご提案のとおり、今回のアンケート調査に対するお礼のような一文を加えたい。(環境省・大嶋)
- ・ アンケートの対象者が登山者なのか、あるいは観光客も含めるのかが不明瞭で、登山者のみを対象としているのであれば、設問の内容を登山者目線に沿ったものとして、登山者が回答して、満足できる作りのアンケートにした方がよい。
例えば問32について、登山頻度の選択肢を登山者の意識により合わせた方がよい。
問31の登山レベルについても、北アルプス南部地域へ入る登山者に合わせた書きぶりになってい

ない。ザイルという言葉も、最近ではロープという表現が一般的。

問30の登山歴について、登山をほとんどしたことがない人は北アルプス南部地域に入っていない。なので「ほとんどしたことがない」という選択肢は不要ではないか。

問14・15で登山者が観光客かを判別できるようにしているのであれば、登山をした方に聞く設問については、登山者の意識を高めるような書き方をすることで、きっちり回答していただけるのではないか。(日本山岳ガイド協会・武川)

⇒ 問30～32については設計が悩ましい部分であった。文章と選択肢の内容を洗練させていきたい。(日本交通公社・安原)

- ・ アンケートの実施方法について、デジタル媒体を使い慣れていない中高年の登山者も多いが、オンライン調査と紙面による対面調査の両方を実施する予定はあるか。(やまたみ・福田)
- ⇒ 新型コロナウイルス感染症の状況を鑑み、現下において対面調査は望ましくないと考えており、今年是对面の聞き取り調査は実施しない予定。(環境省・大嶋)
- ⇒ アンケートの対象者を登山者に絞るのであれば、アンケートの内容について見直しの余地があると思うが、全ての設問に回答することで登山者の意識が上がると思われる。(やまたみ・福田)

- ・ 登山はしたことがないが協力したい、寄付したいという方も存在すると考えている。山小屋エイド基金では登山経験者の割合などの結果はいかがだったか。(環境省・森川)
- ⇒ 数値は取っているが、今すぐには登山経験者がどれくらいいるかはお答えできない。ただし、自分がお世話になっている山小屋を助けたいという方が多く、登山経験者がほとんどだったと記憶している。これから登る山に対して寄付をする方はやはり少数派だったのではないかと思う。(山と溪谷社・萩原)

- ・ アンケート問1から問3について、選択肢が全て「知っている」となっているが、アンケートを見て初めて知ったという方も出てくる可能性がある。正確には事前に知っていたかどうかを聴取すべきなので「詳しく知っていた・大体知っていた・あまり知らなかった・全く知らなかった」という聞き方をするのが正しいのではないか。
- ・ 問4について、特定の地域に関わらず通常の登山を想定した設問なのか、北アルプス南部地域に特定した設問なのか不明確。どちらなのかがはっきりわかる設問にしなければ、回答の分析や解釈が難しくなる可能性がある。また、選択肢の3番から7番について、区分が細かすぎるのではないか。全体のバランス等を考えて、もう少しまとめても良い。
- ・ 問7について、寄付金の支払い前にアンケートに回答するケースが考えられる。アンケート回答後に支払う人の回答をどう拾うのか検討していただきたい。これは問8から問11までの選択肢にも影響があり、併せて検討する必要がある。
- ・ 問14と15について、ウェブ上で実証実験の情報を見て、何か協力したいと思い現地には来訪していないが寄付をしたり、アンケート調査に回答したりするケースが想定され、こういった方に対応した設問にすべき。
- ・ 今回の実証実験で収集したデータは、あくまで1か月間のデータであり、必ずしも登山者全体の意思を表すものではないという点に留意する必要がある。今後の議論の土台になるような数値は出せるかと思うが、目標値を今回の調査だけで導くのは難しいだろう。肝要なのは、普段から登山者の

数や行動などに関するデータを蓄積しておくことで、アンケートの結果を読み解き検討するには、母集団となるサンプルがなくてはならない。こういった数値の蓄積は今後の課題であろうが、今後目標値等を議論する際は、この点を十分に踏まえる必要がある。

(以上、北海道大学・愛甲)

⇒ この場では個別の回答を差し上げられないが、いただいたコメントを踏まえて内容を作りあげていきたい。(環境省・森川)

- ・ 問4について、サポータージャーニー（若しくはサポーターズジャーニー）を意識した選択肢にしてはどうか。サポータージャーニーとは、利用者があることにこれから参加する際、初めに参加するきっかけがあり、だんだん関係が深まっていく、という一連の流れのことで、その流れに沿って利用者を誘導していく考え方をいう。この観点から考えると、現時点では問4の選択肢が序列なしに並んでいる印象があり、サポータージャーニーに沿った示し方をすることが必要ではないか。今回は利用者参加制度を全面に打ち出していることも考えると、アンケートの回答者には参加レベルやステップのようなものをイメージしていただけると、今後制度が本格導入となった場合に利用者からどこまでどのような協力が得られるかを推し量る資料になるのではないか。また、利用者「参加」という観点からは、寄付や実働による参加のみならず、例えば登山道整備の問題点や状況の困難さを他の知り合いに伝えたり、SNSで発信したりすることも参加の形態として考えられる。こういった参加形態についても選択肢として取り上げてはどうか。(東京農工大学・土屋)

⇒ いただいたご提案を踏まえて検討してまいりたい。(環境省・大嶋)

- ・ アンケートの調査方法について、登山口等での呼び掛けを実施する主体はどこを想定しているか。(北アルプス南部地区山岳遭難防止対策協会・福間)

⇒ あくまで検討中の段階だが、地元の山岳ガイドさんに依頼する方向で検討を進めている。(環境省・大嶋)

⇒ 私たちは遭対協隊員ややまたみさん等の協力を得ながら、登山口における遭難防止の相談活動を秋にも実施する予定である。こういった相談活動と並行して、アンケートの呼び掛けも実施するとなると、活動のバランスをどのように取るべきか気がかりである。(北アルプス南部地区山岳遭難防止対策協会・福間)

⇒ 前向きなご提案大変ありがたい。今年については相談活動の妨げにならない範囲でご協力いただければと思っている。もし可能であれば相談所の開設期間等に広報媒体のカードを配っていただけるとありがたいが、個別にご相談させていただきたい。(環境省・大嶋)

⇒ 登山者の方や利用者の方からすれば、北アルプス南部地区山岳遭難防止対策協会の枠組みで行っている周知なのか、利用者参加制度の枠組みで行っている周知なのかについてはあまり関係がない。北アルプス南部地区山岳遭難防止対策協会による安全登山等の呼び掛けと今回の利用者参加制度の周知について、お互いに可能な範囲で連携して行うことで、登山者の理解促進に向けた相乗効果を狙っていきたい。(環境省・森川)

- ・ 登山者か否かや支払い意志に係る設問について、他の設問への分岐を整理した上で設問の順番を検討してほしい。(信州大学・鈴木)

⇒ 他の参加者からご指摘を頂いた事項を含め、内容を精査する。(環境省・森川)

- ・ 回答者の関連など意見を頂戴するための自由回答設問を設けていただきたい。また、問4の選択肢「その他」についても、回答者の方がアイデア等を書き込めるよう、スペースを工夫してほしい。(山と溪谷社・萩原)
- ⇒ 自由記述の設問を盛り込むことを検討する。(環境省・森川)

- ・ 登山道等でのカード配布について、上高地と中房は登山者が多く効果が見込まれるが、横尾を通過する利用者は上高地も通過する。この観点から、横尾と上高地の両方を配布地点に設定する理由は何か。(やまたみ・福田)
- ⇒ 横尾は通過者のほぼ全てが登山者と想定されるため、全員にお声掛けができる一方、上高地は登山しない方も多くいることが想定される。現場でのオペレーションの観点から、横尾も配布地点として考えている。(環境省・大嶋)
- ⇒ 現場には実際に配布する人を配置して、横尾であれば手当たり次第に呼び掛けて、カードを配り、上高地の場合は観光客を除き、登山者を見分けながら配る、という理解で良いか。(やまたみ・福田)
- ⇒ そのご理解で相違ない。(環境省・大嶋)

- ・ 登山道等でのカード配布期間について、優先順位付けの根拠は何か。(やまたみ・福田)
- ⇒ 9月の連休に登山者が集中すると考えており、実証実験期間中の連休を最優先に設定した。一方、紅葉シーズンにも利用者が多くなることが想定され、配布できる日数が限られる中、最適な日程の判断が難しい。(環境省・大嶋)
- ⇒ 今回作成したカードを現場に配置された人が登山者に呼び掛けながらできるだけ短時間のうちに積極的に配布し、アンケートへのご協力のお願いと寄付金のお願いを呼び掛ける、という理解で良いか。(やまたみ・福田)
- ⇒ そのご認識で相違ない。(環境省・大嶋)

以上